

INTERVIEW

35歳
だった

ピアノと心で奏でるジャズの音色
ジャズ・ピアニスト、ボーカリスト、スタインウェイピアノ公認アーティスト
平木かよ



ひらきかよ

福島県出身。国立音楽大学卒。スタインウェイピアノ公認アーティスト。3歳からピアノ、4歳でバイオリンを始める。1988年来米。パリー・ハリス、ハリー・ウィンティカーに師事。98年、作曲も手掛けたアルバム「I miss you」発売以来、最新作「Wish You Love」まで5枚のアルバムを制作。2003年、ブルーノートでロン・カーターと共演。04年から始めたジャパントアールは毎年好評を博し、09年からはヨーロッパ/アジアツアーに拡大。同年JALの国際線機内誌で、海外で活躍する日本人として紹介される。www.kayojazzpiano.com (写真はThe Kitano New York, The Bar Loungeで)

「おしゃべりなのは、やっぱりジャズよね」

大人びたクラスメートの言葉に影響され、ジャズっておしゃれな音楽なんだ、とあこがれ始めた高校時代。町に一つだけあったジャズ喫茶で、初めて聞いたセロニアス・モンクやバド・パウエル。大御所らの自由奔放な音の奔流に震撼した。当時のジャズ喫茶といえ、暗い照明とたばこの煙、ブラックコーヒーの香りが漂う、近寄りたいたい大人の男性の世界だった。不良と呼ばれようが、ジャズを聴きたい一心で、制服姿で何時間もジョン・コルトレーンに聞き入る放課後だった。

自宅ではピアノ教室を開いていた母親は、レッスン場にはベビーベッドを置いて平木を育てた。生まれたときか

ら一日中ピアノの音を聞き、3歳のころには見よう見まねでピアノを弾き始める。クラシックからロック、歌謡曲まで、あらゆるジャンルの音に親しみ、曲を聴けばそのままそれを鍵盤の上で再現できるほど、ピアノと音楽には大きな自信を持って成長した。

しかし、ジャズに出会ったとき、その自信もあつてなく崩れ去った。

「何だろう、これ？つて。難しいなんてもんじゃなかった。別次元との出会いでした」

勇んでジャズピアノの個人レッスンを受け始めるが、基礎練習ばかりで一曲も弾かせてもらえない。焦りと消化不良の気持ちを抱え、訪れたのがニューヨークだった。たまたま伝説のジャズピアニスト、パリー・ハリスのワークショップを耳にし、観光そっちのけ

でレッスンに駆け込んだ。「とりあえず弾いてみる」という、実践を重んじるパリーの教え方に戸惑いつつも、鬱積した思いを一挙に吐き出すように鍵盤を叩いた。

「すごく楽しかったですね。全身全霊という感じで、杓子定規で理論を重んじる日本的な教え方では、なかなか心に響くことがなかった。しかし、「心に触れる音、感動する音をたくさん聞けば、技術は後からついてくる」と唱えるパリーは、おんぼろピアノを前に何度も曲を弾いてみせてくれた。ジャズとは何か、その真髄に近づくための技術面と精神面を同時に学んでいくうちに、ジャズピアニストとして生きる決意を固めていく。

を始めたころ、グリニッチ・ビルリッジにあるジャズの老舗「アルトロ」の存在を耳にする。大物ジャズプレーヤーがレギュラー演奏する場所として有名だった。「当たつて砕ける。ここで演奏できれば幸せ」という必死の思いだけを支えに、オーナーに掛け合った。

「前座でしたが、『やってもいいよ』と言われたときには、涙がこぼれるほどうれしかった」

メインの演奏が始まる前の空席の多い寂れた雰囲気の中、雨の日も風の日も無我夢中、毎日通つて演奏し続けた。35歳だった。

活では精神的にも打ちひしがれ、ボロボロだった。何度も挫折しかけては、そのたびにピアノを捨てきれない自分を認識する。一歩一歩苦難を乗り越えるうちに、普通に生きることがやピアノが弾けることへの喜びを心の底から感謝し、「死ぬ気になれば何でもできる」と、再び演奏活動に情熱を燃やす糧にもなった。

「偶然は必然であり、毎日の偶然的な出会いを未来につなげていくこと。それがニューヨークの街の魅力ね」と、多くの出会いと偶然をきっかけに手に入れたアルトロでの出演は、16年目を迎えた。前座はメインとなり、多くの常連ファンもついた。さまざまな人種とドラマが行き交うこの街と、平木のニュージャズ魂が共鳴し、深く心に響くピアノの音色を奏でていく。

敬称略(森川紗衣)